リステラス星圏史略
古資料ファイル
７－X
（次世代＆転生編）

（発掘整理中）

霧樹里守 is 土岐真扉

『　（転生編の設定Memo）　』

『　（転生編の設定Memo）　』　（@小学校……？？(^◇^;)”　）
2007年5月18日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

◎　アリサ・ラン＝エフレモヴナ、は、
　　サユリ・ラン＝エフレモヴナの一人娘。
　　したがって、サキの活動年数はもう少し短くいたしませう。

「あたしはどうしてもサキが好きになれないのよ。読んでいるとなんだか自分の欠点を見せつけられてるみたいな気がして。」
「へエ！　そう!?　実を言うとわたしはレイが気にくわない。やっぱりあなたと同じ理由（わけ）でね。」……ふむ。でもいくら作中人物扱いとはいえ、自分の叔母さんの悪口を言われるってのはいい気持ではないねェ。」
「叔母!?　だれが!?」
「……あれ～～っ！　知らなかったの？　わりと有名なんだけどなァ。……あのね、あなた。わたしはサキ・ランの姪っ子なの。」
「え……。ってことは、サユリ・ランの娘?!」
「Yes.ちなみにわたくしめの本名はアリサ・ラン＝エフレモヴナと申しま～す。」
「……！　知らなかった……。」
「やれやれ、その調子だとユリスの事も知らんのでしょうね。
　ちょっとおいで。」
「……ちょ……ちょっと！　どこへ行くの？　そっちは生徒の立入り禁止よ。ユリスてだれ?!」
「普通の生徒ならね。わたしは特権階級なの。従姉の所へ行くのに許可なぞいるか」
「従姉!?　だってサユリ・ランは二人姉妹で……　ああ、お父さんの方ね？」
「いーや、ユリスは母方。」
「……え――っ!?　それじゃ……　サキに子供いたの?!」

『　レイ　』　（@？？年2月4日）
2007年2月14日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

レイ

嵐のあいまに静けさの
ふとおとずれることがある
嵐が過ぎたと思って空を仰ぐ
一条の光を見る

すると
実はそれこそが台風の
猛る目であったりするのだが、
青髪をなびかせ、あの少女もまた、
そんな感じの瞳をしてた。

アリサとアビス　――アビスより。

――予想に反して彼女は、ほとんど変化というものを見せなかった。
どうも私のようなひねくれた図太さとは違うらしい、持って生まれた
大らかさというのか、単純で一本気のように見えるわりに寛容で、
どんなことでも順応してしまう。
たぶん彼女自身を変えてしまうことなど、できないのではないか。
……時折、彼女の背なかに、
妖精の羽が見える。

※　アビス・クリア　と
　　アリサ・エブィーナ（エフレモヴナ）の色鉛筆イラストあり。

A．C．（アー・クー）と、
A．E．（アー・エー）の共有物には、
A．D．（アー・ダー）と記入してある。

（　サキ　→　アビス・クリア　）

『　（創作？ノート）１　』　（@中2!!）

2006年12月29日 連載（2周目・地球統一〜ESPA） コメント (1)

サキ　→　アビス・クリア　　）
レイ　→　アリサ・エフレモヴナ　）→　残留思念の強さによる偶然
？　　→　？　　）←……※

――ああ、まちがいない、この詩（歌）だ
わたしが作ってサキに送った……
まちがない
アビスはサキだ　アビスは……

わたしはネェ　前世の記憶が残ってるのよ
だれも信じないけどね……
――人を探してるんだ
一生かかっても　探しだして　どうしても
償なわなきゃいけないことがあるんだ

ソレル女史は心の病気なんだ
10何年か前にサキって人が死んでからずっとだよ
女史と18ちがいだったけど、女史はあのとおりだから
娘のように妹のように友だちのように　サキを愛していたよ
女史は、サキやその仲間たちが死んだのは
自分のせいだと思って
10何年もの間　苦しんできたんだ……
アビス、あなたならできる
いや、あなたにしかできないんだ
女史を助けてあげて……

どこかで会った――もしかしたら!?　……→※

――ねぇ、いつか、どこかで会ったことがないか!?

われわれは、あなたがいままでいた

宇宙の属している、この超空間にある

（つまり三次元ですね）

魂を管理しています。

魂たちは〇次元にある“泉”より生まれ出でて

成長するに したがって より複雑な次元世界へと

進むのです

次元の数がふえれば疑問の数もふえる

あなたは　この一生で　驚い的な進歩をとげ

ましたが

まだ数多くの疑問を残しています

もっと見て　聞いて　そして考えていらっしゃい

全ての疑問が解結した時に

四次元への扉が開かれます

.

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2016年12月28日11:53

…ぅわ〜ッ!!!　！（＾◆＾；）！

この設定！　忘れてた〜〜〜〜〜ッッｗｗｗｗｗ

『　☆略年表　–　第二部　』　（@中2？）
2007年1月3日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

作品年数　サブキャラクター　事件・備考　歴史的背景・作品

C.E.32　ユリス生まれる。
C.E.33　アリサ・ラン・エフレモヴナ生まれる
C.E.34　アビス・クリア生まれる
C.E.35
C.E.36
C.E.37
C.E.38
C.E.39
C.E.40
C.E.41
C.E.42
C.E.43
C.E.44
C.E.45
C.E.46　アビス、《エスパッション・スクール》へ。12歳
C.E.47
C.E.48
C.E.49
C.E.50
C.E.51
C.E.52
C.E.53
C.E.54

C.E.70くらいで、エリーの生物年齢40くらい。

（　ユリスがサユリに育てられ、アリサがエリーの娘であると　　考えられないこともないのじゃない。）

『　（The LORD of the Rings）　（14）　』　（@中学2年以降。）

2007年4月22日 連載（2周目・地球統一～ESPA） コメント (1)

　ユリスがサユリに育てられ、アリサがエリーの娘であると――考えられないこともないのじゃない。
いや、エリーが結婚しちゃまズいのかなァ、逆でもよい。あるいは“ソレル女史及びエスパッション・スクールの保護下”ということで、ユリスはだれを養母としても育たなかったかもしれない。

　地球――リスタルラーナ　1500光年

1年　25　35
2年　30　30
3年　35　25　　15　　20

ユリスの育ての親ってケイじゃなかったっけ？　May.19 (by姉)
アリサは放っぽらかしても、ユリスには誰かついてた方がいいんじゃないかねぇ　May.19 (by姉)

コメント

りす
2007年5月6日1:43
……しかしこの頃（ワタシが14歳頃）は既に、姉に日記を読まれるのもイヤで苦労して隠していたし、創作ノートも（実は）なるべく見せないように必死で逃げ回っていたにも関わらず……

全然！　なんも感づかずに（？あるいは知っててイヤガラセで？）勝手に読んじゃっては、いらんコメントを記入していく「姉」って……★

今に至るも思うのだが、わが「姉」にとっては自分の「妹」に対して基本的人権だの尊厳だのの存在を認めてやろうという気は……

　まったく無いらしい★(=_=)★

（その点は「母」もだけどな★）　★(-_-;)★

「 いつかある日に 」

　いつかある日に

「いつか行くんだ」

　"トレイン" ...テラ（地球）系の科学者が開発したのでこの愛称のある、宙空陸水万能の可変型・多重式荷客列車。

　その軌道が地平に消えてゆく彼方を指さしては、いつもその少女は誇らかにそう告げるのだった。

　彼女の示す方角には、この星唯一のＡ級発着所...つまり、列車がそら（宇宙）へと跳び出す口がある。

　衛星間、惑星間、そして時に恒星間を渡る数少ないトレインは、そこで狭苦しいフェリーシップ（船）の胎内から解き放たれて、この惑星の上を一巡するのだ。

　乗って、宇宙空間に旅出つのが、この紫陽花色の髪をした、シティ（市）から一歩も出たことのない少女の、もうずい分長い間の夢であった。

　　X　　X　　X

　ひとりの少女が廊下を急いでいる。

「ねェ。アビス！　次の時間...地球史、自習かなァ？」

　すれちがいざまに別の数人が声をかける。

「わかンない...いま確かめに行くトコ。」

　そう云いかえしてアビスはエスカレーターの上を駆け降りる。

　同じ頃。

「いかがでした？　お探しの生徒は見つかりましたかしら。」

　手ずから茶の盆を運びながら、ふくよかな笑顔のこの婦人は、この街区きっての有力者、つまりは当エデュケーショナル・センターの所長である。

「お疲れでしょう？　さあどうぞ。」

「あ、すみません。どうも。…疲れる、ってほどの事でもないんです。第一、これが仕事ですから。」

　応待されている青年はまだかなり若い。そう、１７～８と云ったところだろうか。

　その若さで就労しているのと、スペシャリストとしての職業意識が強いところをみると、おそらくリスタルラーナ系。それもぱりぱりの都会（既開発惑星）育ちだろう。

　そう思ってみると、その暖かみのある肌色がなんとも云えず好もしい印象をあ与える。

「それでどうだったのかしら。いまして？」と所長。

「それが…」と口ごもる青年。

「Ｄ級、Ｆ級、かろうじてＣ級の下、って感じの子は結構いるにはいるんです。でも今回その存在が感知されているのは特Ａ級、それもひょっとして最近じゃ少なくなってるスペシャルクラスじゃないか…って、云われてるもんですから。」

「スペシャルクラス…というと、あの有名なデレハフスタ（破壊者）レイのような、それこそ超絶的としか云いようのない能力の持ち主のことですわね」

　所長はかすかに眉をひそめる。

「確か１３年前のあの訳の解らない対侵略者戦で、殆どが戦死した、と聞いていますけれど。」

「ええ。そうなんです。だから今はスペシャルクラスの能力者ってのはとても貴重な人材で。」

…あ、れ。でも。失礼ですけどリジア・レイのジースト語での正式形容称は、シスターナ・レイズ（破壊成功者レイ）。だったと思いますけど。

デレハフスタ、ってのはジュエリー（普通人）…失礼、これなんかも、もう古語ですけど…サイドから亜人種扱いだったゼネッタ（超能力者）の革命行為を憎んでの呼び名で…確か差別用語リストのひとつだったと…」

"青年" は若い世代だ。

最も混乱することなく新人類という概念を受け入れたリスタルラーナ星域の出であるということを割り引いてもなお、あの頃の世界の実相を理解するためには若すぎる。

「そうでしたわね。つい間違えて。このあたり（惑星）では、そうは呼ばない人が多いものですから。」

「……で、お願いがあるんですが。」

青年の話は唐突に飛ぶ。

「上の学年にも検査を行わしてもらえませんか？」

「上の学年にも?!」

所長はとまどう。

「でも上級の生徒たちは既にみな機械によるＥＳＰチェックを受けていますわ。それを今さら調べなおすというのは…」

このせかい（惑星）の事情も考えて欲しい…そう所長は云いたいのだ。

リスタルラーナ育ちの地球人、彼女自身に表だって新人類の存在を蔑視する気はまるでないとは云え、その歴史を通して〈ゼネッタ〉を迫害し続け、かつ彼らの能力の超常性を怖れ憎んできたジースト、旧・星間帝国人達と共にこの辺境惑星へ入植してもう１０年以上になる。

いくら星間国家連合がＥＳＰ憲章を制定し、エスパーがいかに宇宙開発その他に有用な人材であるとのアピールがなされた所で、歴史と伝説に培われた人の心の小昏い部分というものは、ようよう立ち消えるものではない。

　地球人のなかにさえ、『魔女狩り』とか称して~~あの時以来~~エスパーを暗殺し続ける者がある位だというのに、ましてジースト星系人が。

　そのジースト民族が人口の３分の２を占める世界で彼女は子供たちを教育しているのである。

　ＥＳＰ能力者をスペシャリストとして育成する、名高いエスプ・アション・スクールから、潜在能力の保持者を探しに人が送られて来る。

　けっこう、調査に協力しようではありませんか。将来まわりの人間に畏怖感を与えることになるような子供なら、早目に~~その~~仲間の所へやって環境に適応するすべ（術）を覚えさせた方が、その子供自身にとっても幸福だろう。

　だからこそ職員会の反対を押し切り、後のP.T.A.の抗議をも覚悟の上で、彼女は所長としてこの青年を養育センター内に立ち入らせたのだ。

　しかし。

　子供時代に発現することのなかった潜在ＥＳＰというものは、もう余程の機会がないかぎり、その後に表に出ることはないそうである。

　それならば既に子供時代から思春期の始まりへと成長しつつある生徒たちの場合、いま無理矢理に発見されさえしなければ、一生を普通の人間として平和に暮らせる望みがあるのである。

「…お断わりしたいと思います。」

　固い、冷たい声で彼女は云った。

　もとより実制裁力はないとは云え、人類史上に輝かしい足跡を残したＥＳＰ憲章に反くことは１００も承知の上でだ。

　それでも子供たちがかわいい。

「今夜の宿舎は私どもで用意いたしますから、明日の朝一番の便でこの惑星をお起ち下さい。列車の手配もこちらでしておきましょう。」

　急変した彼女の態度に青年はかなりのショックを受けたようで、

「…ど、どうして…」と呟くなり絶句してしまった。

((……解らないでしょうね。))

　彼女にもし息子がいたとしたらこのくらいの年頃だろうか。

　保護された環境で、知識と、理想と、「自分に自信を持ちなさい」という言葉だけを教えられ、実世界のありとあらゆる矛盾を知らず、隔離された存在になりつつあるのだということさえ。

「おひきとり下さい。来客用の宿泊施設まで御案内します。」

　立ち上がった時に軽く目の回るような感覚があるのは歳のせいだろうか。

　憐れにしおたれた青年の肩を見降ろしながら、

　…これでいいのだ。

　深い哀しみめいた感情とともに彼女はそう感じていた。

　検査をしてもし見つからなければ見つからないで、生徒たちは互いに相手の様子をうかがうようになってしまうだろう。

　"怪物" は誰か。

　それは文字通りの魔女狩り、地球も、ジーストも、かつてイヤというほどに味わってきた疑心暗鬼の地獄なのだから。

　所長と、青年と、２人が連れだって廊下へ歩み出したちょうどその時、けれどアジサイ色の髪を~~した~~なびかせた少女が１人、駆けて来るところだったのだ。

「あー、所長センセっ♪　ね、うちのクラス、次の時間自習ですか？　みんながトリプルボールの練習をやりたいって…」

　先刻アビスと呼ばれていた少女である。

　途端、所長のすぐ隣で青年が大きく動いた。

「見つけた！　Ａ級ＥＳＰ！」

リステラス星圏史略
古資料ファイル
7 ーX
（次世代＆転生編）

http://p.booklog.jp/book/112816

著者：霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/112816

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト